

ジェラート

中村 龍介

ピンポン。六月の日曜日、朝のまだ早い時間に玄関のチャイムが鳴った。誰だろう？ モニターには箱を抱えた男の人が写っている。宅急便だ。「解錠」と書かれたボタンを押して、一階にあるマンションの入口ドアを開ける。

七階までエレベータで上がってくる時間を見計らって、シャチハタを手にわが家の玄関を開ける。先ほどモニターに写っていた男が立っていた。

「お届け品です」「有難う」と、指差されたところに印を押して、荷物を受け取る。靴箱ほどの大きさだ。送り状の差出人を見ると、世田谷に住む四女の名前がある。ということは、今日は父の日？ 確かに、第三日曜日だ。

独り立ちした四人の娘の中では一番のお父さん子。それに、未だ小さい時から自分が貰うよりも他人に贈り物するのが好きだった。独居老人となった私にも誕生日や父の日に何かしらサプライズの品物を送ってくる。

キリスト教の金言集の中に次のような言葉がある。

「わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。わたしはこの手でわたし自身の生活の為にも、共にいた人々の為にも働いたのです。あなたがたも、このように働いて、弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与えるほうが幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもつて示してきました。」

― 「パウロの手紙」聖書、使徒言行録二〇章三三〜三五節

私も娘も特にキリスト教に惹かれるものではないが、何となく共感できる言葉ではある。

それはともかく、「クール宅急便」と表示のある箱を早く開けないとー。包装紙を剥ぐと発泡スチロールの箱が出てきた。どうやら中身は溶けやすいものらしい。フタを取ると、冷蔵庫を開けた瞬間を思わせる冷気に包まれて、アイスクリームのカップのようなものが六ヶ入っていた。

取り敢えず、六ヶの紙パックを全部冷凍庫に移して、箱の中から出てきた、説明書を読んでみる。

「この度は〇〇のジェラートをお買い上げ頂きまして誠にありがとうございますました。(中略) 召し上がる前に、予め常温に五分程度おき、スプーンで軽くすくえる程度までやわらかくしてからお召し上がり下さい」とある。

六ヶの紙パックの中身は、アイスクリームではなく「ジェラート」という氷菓らしいと分かった。これはイタリアのフィレンツェ発祥の氷菓で、果汁、果肉、牛乳などを混ぜて凍らせたものとか。

まずは、一カップ試食してみようと、「アルフォンソマンゴー」と書かれた



カップを取りだして、二十五度の室温の中に置いた。アルフォンソとは人の名前前で、「アルフォンソマンゴー」はマンゴの王様らしい。

キッチリ五分後、紙パックのフタを取ってみた。押し込まれた紙パックの中から解き放たれたようにマンゴの香りが漂い始めた。恐る恐るスプーンで上の部分を少しすくって口に入れる。

「何だ、これはシャーベットではないのか」というのが第一感。一パックをじっくり味わいながら食べてみた。確かに、マンゴの匂いが口の中に充満し、柔らかな歯触りとまるやかな甘みの舌触りは、シャーベットよりももう一段デリケートな味わいのように思える。

冷凍庫には、苺ミルク、シチリア塩キャラメル、ベルギーチョコレートなどと書かれたパックが未だ五ケも残っている。全部食べた暁には、ジェラートについて一端のウンチクを語ることができるようになっているかもしれない。

【二〇一九年六月十六日記 原稿用紙約四枚 課題「におい」】